林 正明＝主宰

復刻版

近事評論 扶桑新誌

全十一巻・別冊一

全三回配本〈'90年4月→11月〉

本体揃価格＝一八〇、〇〇〇円

士族問題、琉球処分、財政問題、
国際社会における日本のあり方…
鋭い政府批判を展開しつつ
あけぼのの近代日本社会を論じた
政論雑誌の復刻版！
自由民権期、都市民権派の
自由主義思想と運動の軌跡を辿る

不二出版

収録内容

『近事評論』明治九年→一六年――全七巻

『扶桑新誌』明治一一年→一五年――
『扶桑新誌』改題
『政海志叢』明治一六年――全四巻

解説（水野公寿）・総目次・索引――別冊

内容見本〈原本は菊半判で和綴ですが、復刻版では八〇%に縮小し、一ページに原本の二丁分を収録しました〉

明治十五年四月二十八日

○地方ノ民心自治ノ制度ヲ冀望ス

○官吏養老法ヲ設ケバ豫メ濫用ヲ防グ可シ

○丸山作樂氏ノ歐州行ハ偖又ノ東京見物ニ類スルナキ歟

○立憲帝政黨總會ヲ催セントス

近事評論

三八之日發兌　第三百八十二號

○本紙定價

壹冊四錢　一ケ月前金二十二錢　三ケ月前金六十二錢

○半ケ年前金一圓廿錢　一ケ年前金二圓十五錢

但府外遞送ノ分ハ此外ニ郵税ヲ受ク且前金ノ期月相切レ候ヒ廢止ノ御沙汰無之間ハ引續キ差出可申候

新聞代價御送金之儀ハ府下木挽町郵便局ヘ爲換御取組當社ヘ宛御送金被下度三ツ郵便切手ヲ以テ御送致相成候儀ハ堅ク御斷申上候也

廣告

○近事評論合本是迄初號ヨリ二百九十號迄出來ノ所今般更ニ四冊增製三百三十號迄出來即チ明治九年六月ヨリ同十四年六月迄六ケ年間ノ事歷々徵スベシ此段改テ及廣告候也

但シ合本ハ十部綴ニシテ半價二十錢ナリ幾部ニテモ需ニ應ズ

本局　共同社

近事評論第三百八十二號

○地方ノ民心自治ノ制度ヲ冀望ス

凡ソ天地覆載ノ間ニ包有スル所森羅萬象其生機ヲ備具スルモノニシテ其發育シテ以テ生長セザルモノアル乎、曰ク無キナリ是以テ昆蟲ノ微、草木ノ細モ其發育シテ以テ日夜生長セザルモノナキハ眼アルモノ能ク之ヲ認メテ其變遷ノ跡ヲ知ルヲ得ザルモノ幾ソト希ナリ夫レ人事ノ日々ニ生長シテ智識ノ時々ニ發達スルモ亦タ敢テ之ト異ナルヿナシ若シ夫レ人事一所ニ固着シ智識時ニ從ヒ茲ニ年所ヲ經ルモ敢テ變遷スル所ナク又タ發達スル所ナシト云ハヾ昆蟲ハ孚化ノ青蟲ニ終リ羽化飛冲ノ如キ變ヲナザズ草木ハ萌蘖ニシテ竟ニ梢ヲ放チ葉ク茂ラスヿナクシテ而シテ已マンノミ覆載ノ間豈ニ又タ此理アランヤ

余儕ハ常ニ人事ノ日ヲ逐フテ生長シ智識ノ時ニ從ツテ發達スルヲ目擊シ改進ノ運最モ急激ニシテ以テ端倪ス可ラザルヲ嘆セズンバアラザルナリ然レドモ其運ヤ固ヨリ支離散漫シテ以テ統紀ナキモノヽ類ニハアラズ必ズヤ天地一定ノ儀則ニ從ツテ以テ時々刻々眞理ニ接近スルニ似タリ試ミニ人民ノ意向如何ヲ察セヨ其三數年間ノ經歷ヲ細閲シテ其實迹ヲ諦觀セバ一定ノ方向ハ日々ニ自治制度ニ接近スルモノアルハ敢テ爭フ可ラサルニ似タリ今其最モ覩易キモノヲ擧ゲテ之ヲ証センニ府縣會議ノ進歩ハ殊ニ著ルキモノト謂フ可キ乎

夫レ明治ノ十一年ニ於テ初メテ府縣會ノ設ケアリシヤ是

復刻にあたって

『近事評論』は、一八七六(明治九)年六月、林正明の主宰する共同社より創刊された民権派の代表的雑誌のひとつである。林正明は、自由党内でも都市民権派の代表的存在であり、本誌は自由主義思想に立つ時事評論雑誌いわゆる「政論雑誌」であった。

『近事評論』はそのラジカルな政府批判により、しばしば発売禁止や発行停止、そして検閲による削除などの処分を受けたが、同じく共同社から雇行して発行された『扶桑新誌』は、その間の身代わり雑誌的な意味をもったとされている。

両誌は、明治新政府を内側からゆるがす厳しい国内状況、そして激動する国際情勢を背景に、士族問題・条約改正・朝鮮問題・琉球処分問題・外交問題・天皇制のあり方・地方自治の問題等を鋭く論じ、政策を批判すると同時に新しい視点を提示しつづけた。いずれも近代史研究には欠かせない重要資料である。

一八八三(明治一六)年、新聞紙条例「改正」を不服としてほぼ同時期に廃刊するまでの両誌の全号を『扶桑新誌』改題『政海志叢』もあわせ復刻し諸家に呈するものである。

編集部

両誌の発行時期と誌名の変遷について

一八七六年六月・『近事評論』創刊
明治九

一八七六年七月
明治一一

・『扶桑新誌』創刊

一八八三年一月
明治一六　二月
四月・廃刊

・改題『政海志叢』創刊
・廃刊

推薦のことば

林　正明　一八四八―一八八五

熊本県の藩士の家に生まれる。
一六歳のころ東京の福沢諭吉塾に入塾、
二二歳のとき藩費によってアメリカ合州国に留学。
二五歳で帰国後すぐに司法省少法官に登用され、のちに大蔵省租税権助に就任。
この三年間の官吏在任中に多くの翻訳書を出版する。
一八七六(明治九)年大蔵省を辞して共同社を創業、『近事評論』を創刊、
翌々年には『扶桑新誌』をも発行。
嚶鳴社員に加わって政談演説会を行なったり交詢社・興亜会へ参加、
また自由党・九州改進党の結成に大きく寄与、
とくに自由党では都市民権派の代表として幹事に選出される。
一八八三年『扶桑新誌』を『政海志叢』に改題するも同年二月廃刊。
同年四月の新聞紙条例「改正」に反発し『近事評論』をも廃刊。
一八八五年死去、三七歳。

日本の健康な自由主義を体現した雑誌

荒瀬　豊

林正明が主宰した『近事評論』は、田口卯吉の『東京経済雑誌』と並んで、日本のもっとも健康な自由主義を体現した雑誌の双璧だと思う。西南戦争の以前から、いわゆる士族反乱を旧い特権にしがみつくケチな根性と批判し、生産の業に転ずる必要を同輩たる読者に説きつづけ、各地に芽生える産業のルポを手掛けようとさえした。

西洋列強に無理強いされた不平等条約を改訂することとあわせて、朝鮮・中国との友好を保って東アジアの地位を全体として向上させる、という雄大な構想をまことに具体的に展開した。しかもそうした外交政策を、正明のことばで言えば「大手門から」、つまりのちの鹿鳴館のような裏口工作でなく真正面から世界の世論に訴えてこそ実現できる時代を、われわれ自身が作りうるのだ、と説きつづけた。

たとえば徳富蘇峰の読書時代がもう少し早く始まっていて、共同社の雑誌に触れていたら、後年の国家主義への転向があれほどたやすくはなされなかっただろう、と私は思うときがある。『近事評論』に青春の血をわきたたせた一人に宮武外骨がいる。自由と人権のためなら一歩もひかず、しぶとく戦いつづけた彼の気骨と根性は、共同社の雑誌を読むともっとも理解しやすい。そして、共同社の平和外交論は、石橋湛山の反植民地論にはるかな後継者を得ている。

共同社の最盛時には、『近事評論』『扶桑新誌』それぞれを旬二回発行していた。つまり今の評論週刊誌にまさる刊行頻度で、明治日本の建設構想を細説したのだった。また、林正明はバックナンバーを一〇号ずつ合本して広告し、読者が既往にさかのぼって検討することを求めている。言論の一貫性と体系性をひそかに自負していたことの現れと受け取れる。

（東京大学教授）

関連年表

一八六八(明治一)
王制復古の大号令

一八七一(明治四)
最初の日刊新聞『横浜毎日新聞』創刊
(旧暦で明治三年一二月)
琉球宮古島民が漂着先の台湾で牡丹社村民により殺害される

一八七三(明治六)
西郷隆盛を中心に不平士族対策としての「征韓論」高まる
徴兵令布告
地租改正条例布告
とくに徴兵令に反対して各地で農民の抵抗運動おこる(以後数年つづく)

一八七四(明治七)
明治政府、琉球藩を内務省所管とし琉球王・尚泰に琉球藩主を任命
台湾へ出兵(司令官は西郷従道)

『横浜毎日新聞』創刊号

西郷隆盛

尚泰

日本とアジアのあり方を考える上で貴重な雑誌

矢沢　康祐

自由民権運動は日本における民主主義の出発点となっており、明治政府の専制と闘ったその輝かしい伝統は、今日においても継承・発展すべきものを含んでいる。また、自由民権運動は単に日本の運動としてだけでなく、欧米列強のアジア侵略に対して民族独立の課題をどのように達成するか、どのように自らの近代を創出するのかというアジア的規模での運動の一環を形成するものとしても位置づけられなければならない。民主主義と国家主義の問題は今日の日本においても重要な課題であるが、民権と国権の問題は自由民権運動においても大きな課題であった。

こうした問題の中で、『近事評論』は欧米列強の侵略に対抗するアジア諸民族の連帯を説いた数少ない政論雑誌であったが、しかし他方でその『近事評論』も朝鮮問題や対清関係において結局は国権主義・国家主義を主張し、アジア諸民族との連帯を貫き通すことができない弱さを示した。この弱さは現代日本の問題でもある。今回、『近事評論』だけでなく、『扶桑新誌』『政海志叢』も含めて全号が復刻・刊行され、誰でも容易に手にすることができるようになった。『扶桑新誌』も『近事評論』と同様、沖縄問題・朝鮮問題・対清関係などの論説を数多く掲載している。今後、多くの人によって研究が深められ、日本の民主主義の確立に生かされることを期待したい。

（専修大学教授）

自由民権思想と運動の軌跡を辿る重要資料

後藤　靖

『近事評論』『扶桑新誌』『政海志叢』は、よく知られているように、民権派の代表的な政論雑誌である。この三誌は、明治九年六月三日に創刊された『近事評論』を母胎とする同じ系列の雑誌であり、しかも明治一六年まで継続したということから、自由民権運動の理論の展開の状況を知るうえで見落とすことのできない基本資料である。

民権派政論誌のなかで、このように長くつづいたのはこの三誌だけである。その意味でも、この三誌を丹念に追うことによって、私たちは自由民権思想と運動の発展の軌跡を知ることができるばかりでなく、自由民権派の明治維新論、天皇制論、条約改正論、朝鮮・中国問題や琉球問題についての考え方の変化を系統的にとらえることができる唯一のものであるということができる。

自由民権思想と運動の展開過程を研究する上で欠くことのできない根本資料であるにもかかわらず、今日では本誌を自由に利用することは極めて困難になっている。このようなとき、適切な解説者を得て全巻が復刻されることは一研究者として喜びにたえない。

（立命館大学教授）

一八七五(明治八)
明治政府、朝鮮に対し江華島事件を引きおこし、翌年不平等条約の日朝修好条約を結ぶ。朝鮮植民地化への第一歩。

一八七六(明治九)
各地で旧士族の反乱おこる。神風連の乱(熊本)。秋月の乱(福岡)。萩の乱(山口)

「伊勢暴動」。三重県下の農民一揆
『近事評論』創刊

一八七七(明治一〇)
西南戦争。西郷隆盛率いる反政府軍、敗れる

一八七八(明治一一)
大久保利通、暗殺
『扶桑新誌』創刊

一八七九(明治一二)
琉球に軍隊を派遣し琉球藩を沖縄県とする。尚泰は東京に召致し中央から県知事を派遣
沼間守一らの嚶鳴社、『嚶鳴雑誌』創刊

一八八〇(明治一三)
福沢諭吉ら交詢社発会、『交詢雑誌』創刊
興亜会第一回会合、『興亜公報』創刊(のち『興亜会報告』と改題)
植木枝盛、『愛国志林』創刊(のち『愛国新誌』と改題)
国会期成同盟第二回大会。ここで憲法草案の起草が採択され、各地の民権結社で民衆による憲法草案がつくられる

江華島砲台

大久保利通

士族精神、権力批判、ナショナリズム——民権思想の要素を多く含む雑誌

松永　昌三

不二出版は特異な出版社である。いくら言論出版の自由があるとはいえ、何らの価値も認められそうにない、いたずらに紙を浪費し有限の地球資源を食い潰しているとしか判断できないようなガラクタ出版物の氾濫する中にあって、時流を追わず、世人に阿らず、ひたすら復刻という方式を通して文化の再生産（新作も多少みられるが）に専念している。私のような一介の貧書生にとっては、まことにありがたい出版社で、幾冊かを座右に置き生きる糧としている。そして次にはどのような文化を発掘し提供してくれるかを楽しみにしている。

このたび、『近事評論』『扶桑新誌』『政海志叢』を復刻するとの報に接した。『近事評論』は自由民権派の代表的な雑誌の一つで、三〇年も前、まだ学生であった頃、読み始めたことがある。『明治文化全集』雑誌篇には第三号分までしか収録されておらず、もっぱら東京大学明治文庫のお世話になったのであるが、当時は全部を読み通す時間的余裕がなく、残念に思っていたものである。士族精神、権力批判、ナショナリズムなど民権思想の主要な要素を含んだ雑誌で、民権期を研究するための重要史料であるばかりか、日本の近代思想を解明する上でも絶好の史料であろう。今回の復刻を機に、若い頃を思い起し、全巻通読にあらためて挑戦したい。また同誌が全面的に解剖されることを、とくに若い研究者諸君に期待したい。

（茨城大学教授）

都市民権派の沖縄観

我部　政男

自由民権期の沖縄論議を調査するために東大の明治文庫で二〇数年前初めて『近事評論』の原史料に接した。その時の印象は、編集された史料集を見るのとは趣を異にして極めて新鮮でかつ鮮烈であった。時間の制約もあってとても関係史料のすべてに当たることはできないとのことで、『近事評論』だけは、マイクロフィルムに納め沖縄に持ち帰り丹念に検討することになった。この作業の過程で私は林正明なる人物に関心を持ち、彼の著書、翻訳書を集めながら『近事評論』の沖縄観を対外意識との関連で纒めることができた。そのころ明治文庫にも『近事評論』の完全な揃いはなかった。欠号の補充がなされた後で、そのコピーを北根豊氏から送っていただいて私も揃えることができた。『近事評論』は、都市民権派の思想と行動を考察する上でも貴重な情報を提供してくれる。多くの地方出身者が、都市民権派の論客として活躍しているが、このことは、奇じくも『近事評論』誌上でも、近代日本に於ける中央と地方の接点の舞台を形成していたことになろうか。

研究の基盤を熊本において、着実な仕事を積み重ねてこられた水野公寿氏の解説を得て『近事評論』とワンセットになって『扶桑新誌』『政海志叢』も合わせて復刻されることに大いに刮目し、地方の研究者の便宜を計られることに、心からの敬意と感謝を申しあげたい。

（琉球大学教授）

一八八一（明治一四）
植木枝盛による立志社の憲法草案起草。私擬憲法中最も急進的といわれ、人民の抵抗権・革命権までも条文化

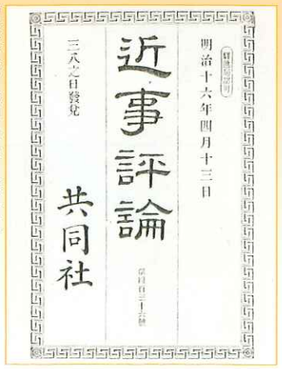
明治一四年の政変
自由党結成会議

一八八二（明治一五）
立憲改進党結成
九州改進党結成
壬午事変。朝鮮京城で朝鮮兵反乱

一八八三（明治一六）
『扶桑新誌』改題『政海志叢』創刊
『政海志叢』廃刊
発行保証金制度の新設など言論取締を強化した改正新聞紙条例を定める
『近事評論』廃刊

植木枝盛

東京横濱毎日新聞
「明治一四年の政変」のきっかけとなった『東京横浜毎日新聞』


明治十六年四月十三日
三八〇二日發行
近事評論
共同社
『近事評論』第四三八号（最終号）

関連復刻版のご案内

横浜毎日新聞

第一期

全四十五巻・別冊三

明治三年十二月～明治十九年四月を収録

本紙は、明治三年十二月八日、日本で初めての日刊新聞として創刊された。のちに編集人は島田三郎となり、明治十一年に嚶鳴社の沼間守一により『東京横浜毎日新聞』と改題され、社も東京に移転する。当時全国各地で日本最初の政治運動である自由民権運動がおこりつつあり、本紙は立憲改進党系の新聞として、折からの国会開設を求める動きに呼応した。

小社では、文明開化の時代をいきいきと伝え、自由民権期の政治と社会の状況を活写した本紙を、まず第一期として創刊号より一八八六年までの十六年分を復刻する。日本近代史・政治史・社会史・文化史の研究等に必須の基礎的資料として広く活用されることを願うものである。

横浜毎日新聞

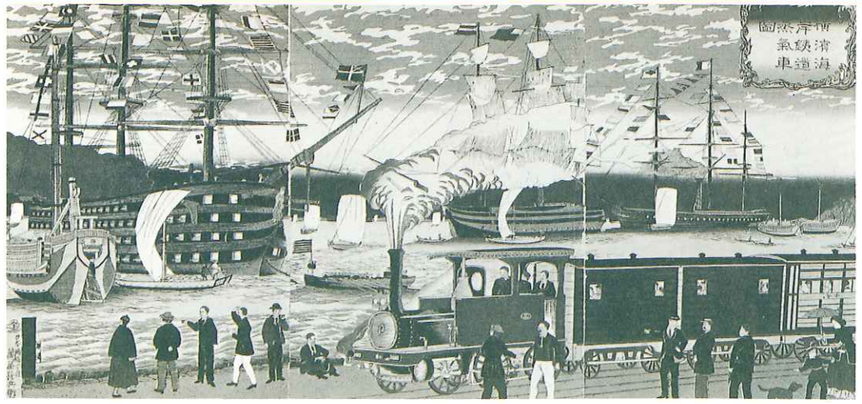
第一期復刻版概要

体裁
A4判・上製・函入　約二〇、〇〇〇ページ

配本
全五回配本（一九八九年五月↓一九九三年一月）

別冊
解説（甘利璋八）・総目次・執筆者索引

本体揃価格
八七〇、〇〇〇円（別冊のみ分売可）



第一期配本予定

		発行年	配本	本体価格
第一回	第七巻～第九巻	●明治七年一月～二月	一九八九年五月	五四、〇〇〇円
第二回	第一〇巻～第一三巻	●明治八年一月～二月	一九八九年九月	七二、〇〇〇円
第三回	第一四巻～第一七巻	●明治九年一月～二月	一九九〇年一月	七二、〇〇〇円
	●配本年度別合計価格　一九八九年度（第一～三回配本）―合計一九八、〇〇〇円			
第四回	第一八巻～第二〇巻	●明治一〇年一月～二月	一九九〇年四月	五四、〇〇〇円
第五回	第二一巻～第二三巻	●明治一一年一月～二月	一九九〇年七月	五四、〇〇〇円
第六回	第二四巻～第二六巻*	●明治一二年一月～二月	一九九〇年一〇月	五四、〇〇〇円
第七回	第二七巻～第二九巻	●明治一三年一月～二月	一九九一年一月	五四、〇〇〇円
	●配本年度別合計価格　一九九〇年度（第四～七回配本）―合計二二六、〇〇〇円			
第八回	第三〇巻～第三二巻	●明治一四年一月～二月	一九九一年四月	五四、〇〇〇円
第九回	第三三巻～第三五巻	●明治一五年一月～二月	一九九一年七月	五四、〇〇〇円
第一〇回	第三六巻～第三八巻	●明治一六年一月～二月	一九九一年一〇月	五四、〇〇〇円
第一一回	第三九巻～第四一巻	●明治一七年一月～二月	一九九二年一月	五四、〇〇〇円
	●配本年度別合計価格　一九九一年度（第八～一一回配本）―合計二二六、〇〇〇円			
第一二回	第四二巻～第四四巻	●明治一八年一月～二月	一九九二年四月	五四、〇〇〇円
第一三回	第四五巻	●明治一九年一月～四月	一九九二年七月	七二、〇〇〇円
	第一巻～第三巻	●明治三年一二月～明治五年一二月		
第一四回	第四巻～第六巻	●明治六年一月～一二月	一九九二年一〇月	五四、〇〇〇円
第一五回	別冊（全三巻） 解説（甘利璋八）・総目次・執筆者索引		一九九三年一月	六〇、〇〇〇円
	●配本年度別合計価格　一九九二年度（第一二～一五回配本）―合計二一四〇、〇〇〇円			

＊―第二六巻・明治一二年一一月一八日より『東京横浜毎日新聞』と改題

続刊予定　第二期・第三期『毎日新聞』と改題

第二期―第四六巻～第九二巻・別冊
（明治一九年五月～明治二九年二月分を収録）
揃予価―九六六、〇〇〇円

第三期―第九三巻～第一四九巻・別冊
（明治三〇年一月～明治三九年六月分を収録）
揃予価―一、一三四、〇〇〇円

近事評論・扶桑新誌

復刻版概要

体裁　A4判・上製・函入　総約四、二〇〇ページ
（原本は菊半判で和綴ですが、復刻版では八〇%に縮小し、一ページに原本の二丁分を収録しました）

本体揃価格　一八〇、〇〇〇円（別冊のみ分売可＝二、〇〇〇円）

配本予定

	復刻版巻数	号数	刊行年	復刻版ページ数
第一回配本			一九九〇年四月刊行	
『近事評論』	第一巻	第一～三〇号	明治九年六月～一二月	一八六
『近事評論』	第二巻	第三一～一〇一号	明治一〇年一月～一二月	四三四
『近事評論』	第三巻	第一〇二～一六七号	明治一一年一月～一二月	四三七
			本体価格　四〇、〇〇〇円	
第二回配本			一九九〇年七月刊行	
『近事評論』	第四巻	第一六八～二三九号	明治一二年一月～一二月	四四二
『近事評論』	第五巻	第二四〇～二九四号	明治一三年一月～一二月	三三四
『近事評論』	第六巻	第二九五～三六六号	明治一四年一月～一二月	四三二
『近事評論』	第七巻	第三六七～四三六号	明治一五年一月～一六年四月	四四〇
			本体価格　七〇、〇〇〇円	
第三回配本			一九九〇年一二月刊行	
『扶桑新誌』	第一巻	第一～八三号	明治一一年一月～一二年一二月	四一四
『扶桑新誌』	第二巻	第八四～一三八号	明治一三年一月～一二月	二六六
『扶桑新誌』	第三巻	第一三九～二〇三号	明治一四年一月～一二月	三二六
『扶桑新誌・政海志叢』	第四巻	第二〇四～二六〇号	明治一五年一月～一二月	三〇四
別冊＝解説（水野公寿）・総目次・索引		第一～六号（政海志叢）	明治一六年一月～二月	約一八〇
			本体価格　七〇、〇〇〇円	

●本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。
●弊社は注文制です。お近くの書店にご注文ください。

不二出版
東京都文京区向丘一―二―一二
TEL 〇三（八一二）四四三三
FAX 〇三（八一二）四四六四
振替〈東京〉六―九四〇八四